

教 仁 名 聞

第 107 号
(発行日)

2019 年 8 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)

63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

釈尊最後の旅にて

お経はインドで生まれました。それは悟りを開いた方でないと言われている。内容となつていきますので、古来から経典は大事に読み継がれてきました。

近世になりまして、それまでは漢文のお経が読まれていきましたが、原典のインド語(サンスクリット語やパーリ語)で書かれている経典が読まれるようになり、また翻訳されたり、研究されたりしてきています。

パーリ語で書かれている経典の一つに「大パーリニツバーナ経」という経典が中村元博士によって日本語に翻訳され岩波文庫で読むことができます。日本語訳の題は「ブツダ最後の旅」です。この経典は中国語に翻訳されませんでしたので、明治以前の日本人は知らなかったお経です。

この経典は釈尊が八十歳でクシナーラの林の中で亡くなられる(涅槃に入る)までのほぼ二カ年ぐらいい間の旅(ラージギルからクシナーラ)という形での釈尊の言行が主題になっている経典です。釈尊その人とその時代環境の香りが伝わってまいります。

もちろん後世に編纂されたものですが、史実を含んだ物語の形式になっています。いにしへの釈尊のナマのお姿とその周りの情景がリアルに伝わってくる興味をそそられる経典です。

出発はインドのやや北東に位置しています当時のマガタ国の都である王舎城(ラージギル)から北方に向かつて釈尊は弟子のアーナンダを伴って旅にでました。

ラージギルからパータリ村を通りガンジス河を越え

て北に進み、コーテイ村などを経て、ヴェーサーリの近くのペールヴァ村に居られたとき、釈尊は病になり、死ぬほどの激痛に見舞われました。

そしてその苦痛を静かに耐え忍びました。やがて病苦は去りましたが、ご自身が涅槃(死)に近いことを感じられたようです。

釈尊の生き様の一端がここに表れていると思います。

釈尊は二五〇〇年前のインドの大地の中で、一人の人として生涯真理を求め、真理に従って生きられました。その生き方は家を持たず、財産ももたず、旅から旅の生涯です。あのインドの大地、焼け付くような大地を裸足で歩き、大木の下や洞窟や辻堂で休み(座って寝る)、日に一食の施しを受けて、持ち物は三つの衣と鉢用の鉢だけでした。蚊やアブに刺された熱風の吹く大地を歩かれたのですから、当然さまざま肉体的苦痛を受けられた

ことでしょうか。しかしながら静かにそれに耐えていかれたのです。釈尊もこの世の苦痛に耐えて生きられました。

私たちの人生も苦痛に耐えて生きねばならない、それがこの世の基本的なあり様ではないでしょうか。

ただこの世を生きる上で受けずにはおれない肉体的苦痛を静かに受け入れるか、嘆いたり愚痴を言いながら生きるかの違いがあるのでしよう。

そしてこの時、釈尊は次のような言葉を語っておられます。

「アーナンダよ。わたしはもう古い朽ち、わが齢は八十となった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによって、やつと動いて行くように、恐らく私の身体も革紐の助けによってもっているのだ」

と、自らの肉体が老いぼれていくことを古い車と革紐の譬えで語られます。

これは二五〇〇年前の釈尊も現代の私たちもまったく同じです。思いはいつま

でも若々しくて健康でありたいと思っても、私たちの思いや希望に関係なく、日々老化し、老衰していく身体です。釈尊は「生老病死の苦あり」としばしば説かれていて、凡夫にとって一番愛着している肉体が老衰し死に至ることは、人生苦の最も大きな悲しみです。高齢者の集まりでの話題は自分の肉体への憂苦ではないでしょうか。

けれども釈尊はこの言葉の後に続けて

「しかし、向上をつとめた人が一切の相をこころにとどめることなく一部の感受をほろぼしたることによって、相の無い心の統一に入つてとどまるとき、そのとき、かれの身体は健全なのである」

と言われました。「相の無い心の統一」とは〈無想定〉と伝統的に云われていますが、自分のあれこれの想念を突破して純粹な事実そのものに帰ることと聞いていいのでしょうか。

その時に釈尊は、事実とあって働いているはかりな

きいのち、真宗で云えば「無量寿」「寿命無量」すなわちアミダにであっておられるのであり、アミダのほかに自己は無く、アミダこそ真実の主体であることをはつきりと自覚されているのでしよう。

アミダは、生まれて、老化し、病んで、死ぬという有限ないのちの変化を成り立たせている私たちのいのちの根拠であるとともに、不老不死のいのちそのものです。この生命のほかに自己無しというのが釈尊のお悟りでありましょう。

このはかりなきいのちは不老不病不死のいのちそのものであり、釈尊はこのいのちに真実の自己をはつきりと自覚されたお方ですから、肉体は老化のきわみであつても、自己自身は〈健全〉であるといわれるのでありましょう。

釈尊は、生老病死の苦から解放される道を求め、三十五歳の時、生老病死の苦を超えられました。その時「我は不死を得た」と仰せられていますが、人生の最

後の説法においても、悟られた法（いのちの真実）が実際に即して語られているのを感じます。

このアミダのいのちを私たちはアミダの名のりである南無阿弥陀仏を聞くことによつてアミダを知らされるのです。はなはだほのかでありましてアミダを知らされるのであります。

その真実に触れるとき「私は死なない」「私は健全である」ということが言える真実にかすかながらでもであつていたのでありましょう。

南無阿弥陀仏はアミダが「ここにいて、汝と共にいる、汝を浄土につれていく」すなわち「タスケル」「ひきうける」との實在せる大悲のいのちの仰せです。この大悲の仰せを聞くところに大悲のいのちを背後に感じるのではありません。

この南無阿弥陀仏の信心は釈尊のお悟りに連なつていふのではないのでしょうか。

(了)

果遂の願によりてこそ

(和讃問答)

果遂の願によりてこそ

釈迦は善本徳本を

弥陀経にあらわして

一乗の機をすすめける

(浄土和讃)

(現代語訳)

阿弥陀如来の第二十願、すなわち果遂の願によつて、釈尊は自力念仏の者をも導き救おうとして阿弥陀経をお説きになり、自力の心のなくならない人に、本願の念仏の一行をお勧めになつた)

(語句)

果遂の願ー 第二十願のこと。

善本・徳本ー 善本とは一切善法の本ということ。

徳本とは一切功徳の本というこつで、善本も徳本も、ともに名号を意味する。

一乗の機ー 一乗とは、同一にすべての人がさとり

に到ることのできる法という意味で、今は本願の念仏

をいう。そして、機とは教法の対象ということ、一乗の機とは、本願念仏の法を受ける人ということ。

* * *

N 「果遂の願とは」

D 「アミダ仏の第二十願のことです。この願は

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞き、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずば、正覚を取らじ。

という願ですが、この中に〈果遂せずば〉とあり、この意味が大事なので二十願を果遂の願ともいわれるのです」

N 「どういふ果を遂げずば、といわれるのですか」

D 「これは〈十八願に転入せしめずんば〉ということですよ」

N 「それはどういふ人に対して誓われた本願ですか」

D 「第十八願念仏往生の願を聞いて念仏申すようになるのだけれども、なお念仏往生の願のお心がいただけず、念仏を専修している、そういう人を見捨てず、十八願の信心に導き入れずにはおかないという願です」

受け取ると、お念仏はさまざまな善の本であり功德の本であるから念仏を称えて、仏になろう、浄土に生まれよう、自分を浄化しよう、というような、宗教心はありながら、念仏を称えて何かを得よう、なんとかなろうと功利的な修行になつたり、現世の利益を得ようという、そういう計らいの中からなかなか出られない、その中にとどまってしまうがちです」

D 「ええそうです。その場合は名号を善本・徳本といわれている、その善本・徳本をたのみにして功德をえようとの願が二十願だと受け取られることもあるのですね」

N 「法蔵菩薩は一切衆生の幸せのために無数の善行をなされ、そして無量の徳を成就されたのですね」

D 「まず十八願は念仏往生を誓い、同時に念仏往生を信じる信心も誓われているのです」

D 「十八願に関わる中で、これを疑うものが出て来るので、二十願が誓われているのであつて、十八願と二十願は密接な関係があります」

N 「それで二十願はそれだけで見ず、十八願を通して見ると、十八願を聞きお念仏を申す人において、十八願がなお信じられなくて念仏一行をもつぱら称えている人を真実の信心へと導きたもう誓いだといわれるのですね」

D 「法蔵菩薩が修行された一切の善が南無阿弥陀仏の名号に収まり、この名号からさまざまな善が表れてくる、それを善本といい、善の結果としてのよき働き（幸せ）を功德といえます。そういう功德がその中に収まり、そこから表れてくる、それを徳本といえます。ここでいう善本・徳本は名号のことです。仏教で一般に

N 「念仏を称えることによつて効果を期待するのですね」

D 「それが名を称えるばかりで浄土に生まれさせる」というお誓いです」

D 「十八願の念仏往生の思し召しを聞きつつ、疑いながらもお念仏を申し続けていく。そこに念仏往生の願の大悲が称えているお念仏を通して、アミダ仏の大悲心が遂にその人の心に浸透し届いて真実の信心となつて下さるのです」

D 「ええ、そういただく二十願のお心がよくわかります。だから二十願を果遂の願といわれるのですね」

N 「ただそうはいっても、十八願から二十願を切り離し二十願だけで願文を受け取ることもあり得るのですね」

D 「ええそうです。十八願の念仏往生の願と無関係に念仏を称えて功德を得ようとするのですね。しかしそうなるとう十八願に転入せしめるといふ果遂の願の意義は少ないと思います。それでやはりこの二十願は十八願との関係で受け取るべきものだと私は思います」

D 「それが一つにはまだ自分は何とかなる、なんとかすれば道がつくというよ

N 「お念仏にこもっている十八願の大悲心が遂に念仏行者に届いて下さるのですね」

N 「ただそうはいっても、十八願から二十願を切り離し二十願だけで願文を受け取ることもあり得るのですね」

N 「念仏を称えることによつて効果を期待するのですね」

D 「ええそうです。十八願の念仏往生の願と無関係に念仏を称えて功德を得ようとするのですね。しかしそうなるとう十八願に転入せしめるといふ果遂の願の意義は少ないと思います。それでやはりこの二十願は十八願との関係で受け取るべきものだと私は思います」

D 「それが一つにはまだ自分は何とかなる、なんとかすれば道がつくというよ

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

N 「どのように見るのですか」

D 「それは一つにはまだ自分は何とかなる、なんとかすれば道がつくというよ

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

D 「ええ、そうです。十八願から切り離して二十願を

N 「どのように見るのですか」

D 「それは一つにはまだ自分は何とかなる、なんとかすれば道がつくというよ

うに自分の方にまだ自分を助ける力が少しでもあると思っているからです。まだ自分の能力を見限れないのです。八方塞がりでも道が無い自分と知られていないから、へ我が名をとねえるばかりでよい、なにもいらない」という絶対のお慈悲の思し召しを通らないのです。それともう一つは、同じ事ですが、念仏往生の願のお心、いわゆる大慈大悲の思し召しをよく聞かず、

自分の方ばかり見ているからです。」
N 「十八願を聞きながら自分をたのみにするのですね」
D 「ええ二十願は、十八願を聞いて、念仏申すようになるけれどもなお十八願のお心がいただけず、へ我が名を称えよ、必ずタスケル」との仰せを聞いてお念仏しかないとなり、本願に疑いがあるまま念仏一行になる、そういう人に対して掛けられたお誓いであると私はいただいております。すなわちそういう本願を疑って念仏申す人を見捨てない、どこどこまでも十八願

に入れてやりたい、助け遂げずにはおかないというアマダ仏のやるせないお心からです」
N 「アマダ仏のお救いは実に徹底していただけます。そこまで手を差し伸べて下さっているのですね。ではへ果遂せざばおかない」とまでいわれる働きはどのようなものでしょうか」

D 「それは十八願の念仏往生の願を聞いては称え、称えては念仏往生の願を聞く。そこにへ我が名を称えよ」という一句に込められている無窮むきゆうの大悲がお念仏を通してその人の心に浸透して下さるからではないでしょうか。人間を見ると逃げような野生のチンパンジーでも、人が毎日餌をやり、喚びかけていくと、その人が敵では無いことが猿にも伝わり、そして世話をしてくれる親切心がチンパンジーの心に浸透して、遂にはその人に慣れ親しむようになる。それはその人の愛情が動物である猿にも不思議に伝わり遂にその人の膝に抱かれるようになるのです」

N 「愛情は不思議ですね」
D 「ええ、それと同じでアマダ仏の大悲心はアマダ仏の名を称え、アマダ仏の大悲の心を何度も何度も聞く人の心にいつのまにか浸透し、遂に人の心に信心として発起しアマダ仏の大悲に気がつくようになるのです。大悲が届いて大悲を知るので、それが十八願の信心です」

N 「浄土の教は如来の大悲心を衆生に与えて救おうとされるのですね」
D 「ええそうです。その大悲心はナムアマダブツのお念仏となって人の上に現行して下さるのです。ですからお念仏のない浄土真宗では救いが現実化してきません。そうなる是真宗の教法は単なるヒューマニズムになるか冷たい自己批判で終わるか、あるいは生きる手引きにとどまります」

るお念仏は大善であり大功徳であるから、これを称えていけば善を重ねることができ、これを称えていけば功徳が与えられることを期待して、それでもつて浄土に往生しようとか、時にはこの世での長寿や健康や財を得ようと計らう、そういう念仏一行は十八願の念仏往生の願心の間ごとくしませんから、お念仏が本来具している大悲の願心が伝わらず、いつまでも自分の行

う念仏行の効果も未来に期待しつつ、そこから離れることができず、十八願に帰することができないということになってしまっているのでは

ないでしょうか。もちろんお念仏そのものに十八願の大悲がこもってますから、まったく十八願に入る縁が無いとは云えないでしょう」

が」
N 「わかりました。ではこの和讃を簡単に説明して下さい」
D 「十八願を信じることができない人に、阿弥陀経を説いて、善本・徳本の名号を称え本願念仏の広大な救いの法をよく聞くことをお勧めになる、となりましょう」

《遠方法話予定》

- 九月十四日。福井別院・午前。法話・座談。
 - 九月十七日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。
 - 九月二十六日。札幌市。昭念寺(真宗興正派)。午前・午後・法話
 - 十月五日。福井別院。午前。法話・座談。
 - 十一月九日。福井別院。午前。法話・座談。
 - 十一月十三日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。
- (詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

《盂蘭盆会法要》

八月十日 (土)

午後二時始まり

* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。